

研究 報告

春まきタマネギ栽培におけるネギアザミウマ防除対策と殺虫剤・細菌防除剤の併用がりん茎の腐敗および収量に及ぼす影響

岩手県農業研究センター 横 田 ひろし 啓

はじめに

岩手県では従来10月に定植して翌年6~7月に収穫する「秋まきタマネギ栽培」が行われてきたが、積雪地域のため越冬後の株消失や抽苔等により作柄が不安定であった。そこで、筆者らは4月に定植して同年7~8月に収穫する「春まきタマネギ」の栽培法の開発に取り組んだ。岩手県内の春まきタマネギの栽培面積は2014年は1haに満たなかったが、栽培法が確立したことや、水田転換畑における作付面積の増加にともない、2019年は40ha以上まで増加している（岩手県農業研究センター、2020）。また、東北地域全体としても春まきタマネギの栽培面積が拡大しつつある（山崎、2017）。

春まきタマネギ栽培は従来から行われている秋まきタマネギ栽培と栽培期間が異なるため、病害虫の発生は不明な点が多く、病害虫防除対策は喫緊の課題となっている。なかでも、ネギアザミウマ *Thrips tabaci* LINDEMANN はタマネギの害虫として世界的に知られており（GILL et al., 2015）、日本でも古くからタマネギやネギの害虫とされている（今井ら、1988）。ネギ栽培では、ネギアザミウマの食害部位である葉身が出荷部位のため、本種による食害が品質被害となるが、タマネギの葉身は出荷部位ではないため、被害とみなされないおそれがある。そこで、ネギアザミウマによる被害実態（横田・福田、2016）や適切な殺虫剤散布間隔（横田ら、2019）、各種殺虫剤の評価（横田ら、2020b）について検討した。

一方、春まきタマネギ栽培では収穫時期以降にりん茎の腐敗が生じて問題となっている。東北地域の収穫期以降のタマネギりん茎の腐敗部位からは *Burkholderia cepacia* complex 細菌が分離されており（遠ら、2019a）、

主たる病害はタマネギ腐敗病（SOTOKAWA and TAKIKAWA, 2004）と考えられる。*B. cepacia* の好適発病温度域は30℃以上とされており（守川・三室、2018）、高温がタマネギの腐敗性病害を助長すると考えられる。しかしながら、腐敗の主因であるタマネギ腐敗病について、現在軟腐病やりん片腐敗病等の各種細菌性病害の予防のため散布している殺菌剤（以下、細菌防除剤）の効果については明確になっていない。また、ネギアザミウマによる葉の食害痕上で *Burkholderia cepacia* complex 細菌が増殖すること（遠ら、2019b）が報告されており、ネギアザミウマがりん茎腐敗の主因であるタマネギ腐敗病の発生と関係すると考えられている。そこで、殺虫剤と細菌防除剤の組合せが収量・腐敗に及ぼす影響について検討した（横田ら、2020a）。

I ネギアザミウマ発生長

岩手県農業研究センター県北農業研究所内圃場（岩手県軽米町：以下「岩手県北農研」）において2014~15年の2か年実施した。各調査時にタマネギ40~60株について、中心3葉の成幼虫数を3倍ルーペを用いて計数した。いずれの年次も殺虫剤は無散布とした。

図-1に本種の発生長を示す。2014年は5月21日、2015年は5月14日より成虫が認められ、その後5月末~6月上旬より幼虫の発生が確認された。各年次の発生

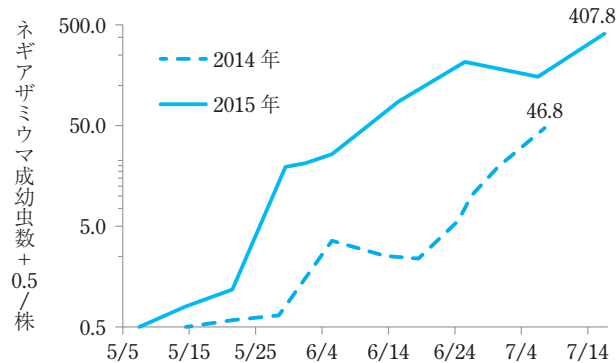


図-1 ネギアザミウマ発生長

Control Effects on Onion Thrips *Thrips tabaci* LINDEMANN and Effect of Pesticide and Bactericide on the Rot and Yields in Spring Onion Seedling. By Hiroshi YOKOTA

(キーワード: タマネギ, ネギアザミウマ, タマネギ腐敗病, 殺虫剤, 細菌防除剤)